

卒業生有志の発案からの寄稿集

福祉心理学科 50 周年にむけて

# 感謝と未来へのエール

暫定版 2024 年 10 月

Ver. 4.1

**寄稿募集 継続中です！！**

## 序

福祉心理学科が創立50周年となることを聞き及び、全くの“ボランティア”として寄稿集を企画しました。

同窓の皆様が、社会の一員として家庭人として、いや地球市民として随所で活躍されています。

福祉心理学というキーワードに何らかの共感を感じる人達、同窓、そして在校生の皆様にエールを送りたい、そんな思いが活動の動機でした。

ご寄稿を拝読させていただくと、皆様が、それぞれの思いに邁進され、或いはご苦労され、そしてご指導いただいた先生方に深く感謝し、同窓・在校生の皆様への強い思いを有しておられることが実感できると思われます。

今般、リリースするのは、10月半ばにお披露目できるためのいわば、「経過措置」であり、今後も再編集、改訂、増ページを試みたいと考えております。

今後も寄稿を大歓迎いたしますのでよろしくお願いいたします。

### 制作に関わった有志一同

49P 大宮廣幸

50P 本田 稔

52P 小原（佐藤）美鈴

52P 高橋郁夫

54I 大内 誠

編集担当 52P 堀川（武田）

## 目 次

序	-----	1
目次	-----	2

ご寄稿                      掲載は主に学籍番号基準です                      ( )内は旧姓です

1.	49P	大宮廣幸	-----	4
2.	50P	佐々木亮次	-----	6
3.	50P	本田 稔	-----	8
4.	50P	本田 (山内) 郁子	-----	11
5.	51P	松川 弘	-----	13
6.	52P	大澤隆則	-----	15
7.	52P	亀倉朱美	-----	17
8.	52P	小原 (佐藤) 美鈴	-----	18
9.	52P	白戸浩雅	-----	21
10.	52P	菅原 憲	-----	25
11.	52P	岡部 (山口) しのぶ	-----	30
12.	54P	長舩浩義	-----	33
13.	54P	又地浩一郎	-----	37
14.	91P	渡部満喜子	-----	45

編集後記



# 被験者体験が相談業務での「子どもは変わる」という信念に

49P 大宮 廣幸

## 1. 1期生—心理判定員—児相

半世紀前に福祉心理学科に第1期生として入学し、大学卒業後、福島県に心理判定員として採用されて、会津児童相談所に配属されました。

児童相談所では、非行や不登校等の相談や知的障害、自閉症、重症心身障害等の発達相談での心理アセスメントや支援プログラムの作成が仕事の中心でした。子ども達の対象年齢は、0歳から18歳までの子ども達でしたが、1.6や3歳児精神発達精密検診の年齢から中学生までの子ども達の相談が多くありました。

児童相談所での心理職の役割は子どもの心理アセスメントだけでなく、子どもが関わる親、同胞、友人等の人間関係や住居や生計維持の状況等の生活環境の力動的な構造の中での子どもや家族のアセスメントも期待されていました。

大学では臨床心理学や発達心理学を履修はしていたものの、専攻してはならず、非行や不登校や障害相談で簡単なアセスメントはできても、私が行う支援では、行動の変容や人格的な成長は難しく、いつも四苦八苦していました。特にアセスメントは、自分の人格を通して行うものなので心が折れることが多くありました。

## 2. 障害は変わらないもの・・・

障害の相談でもなかなか成長を確認することが難しく、支援の意味を見出せず、障害は変わらぬもの、障害は固定されて一貫性のあるものとの認識が頭をよぎることがありましたが、子どもは適切な支援で変化し、成長するという強い思いのような信念が自分にはありました。子どもやケース全体にとって適切な支援とは何かを考え、可能な範囲でと限定的になりますが、支援を続けていました。例えば、通所指導で自己肯定感を一杯持ってもらうことで登校が再開できたといった個別の支援だけでなく、非行少年の地域での孤立を解消し、家庭での生活を続けていけるようにするために、地域でボランティアを要請して学習支援を行う等の地域生活の支援も行ってきました。

「刺激・支援によって子どもは変化し、成長する」といったことは当たり前のことであり、誰でも知っていることですが、私が信念とするに至ったのは、大学時代に小松先生の研究で被験者となって奇跡的な体験した中に経緯がありました。

## 3. 被験者体験

被験者体験とは、先生の色覚の弁別等に関係する研究の被検者になったことです。被検者の対象は色盲や色弱と

言われる色覚異常を持つ方でした。

私は、赤緑色弱であったので小学校時代から石原式検査を受ける度に劣等感が強められ、高校進学でも希望していた工業高校を受験することはできませんでした。

被験者の内容は、今となっては記憶が定かではありませんが、100hue testで色覚検査を受けた後に、スコープを覗き込み、単眼に光刺激を受け、その後に再度 色覚検査を受けるものでした。

色覚検査の結果は覚えていませんが、記憶にあるところでは、被験した後に石原式検査表を見て、色の区別は忘れましたが、数字の弁別ができ、正常な反応ができたということです。先生によれば、網膜に赤か緑の弱い受容体の周波数で駆動したことにより、受容体が短時間ではあるが興奮して弁別が可能になったのではないかと話されていました。私にとっては奇跡的な体験でした。障害は不変なものと考えていましたが、効果的な刺激によって体は反応し、不変なものが変化し、普通の人

こう見えているんだと言うことを体験しました。

#### 4. 子どもは支援で変化し成長する

大学卒業後に、児童相談所での相談支援の業務に就くことになりましたが、被験者での体験が「子どもは支援で変化し、成長すること」の思いが信念となり、自分を支え、平成26年3月に無事定年を迎えることができました。特に在職中の27年間を児童相談所で働くことができ、子ども達の支援に携われたことを誇りに思っています。

私にとって、この信念は財産でした。学生の時に被験者として奇跡的な体験をさせて頂いたことや無理をせずに、少々の努力をして、諦めないという物事に向き合う姿勢を指導してくださった小松先生に感謝しております。

元 福島県県中児童相談所長

# 福祉心理学科開設50周年に寄せて

50P 佐々木亮次

## 1. 私は福祉心理学科2期生です

昭和50（1975）年入学当時は、郷里の羽後本荘駅から仙台駅まで直通電車が、仙台駅前にはやがて役割を終えようとする路面電車も走っていた時代です。大学キャンパスには短期大学時代の建物が残っていて、福祉心理学科はその古い校舎でしたが、中には最新の防音室が設置されていたのを覚えています。

大学4年時は小松紘先生のゼミでした。小松先生は、学問的には厳しかったのですが、優しい兄貴の一面もありました。小松先生のご自宅と私の下宿が割と近くだったということもありますが、ゼミの飲み会後は下宿の近くまで送ってくれました。卒業研究や論文作成は非常に苦労しました。その割に出来は良くなかったし今見てもため息が出てしまいます。このように学問や勉強に関しては模範的な学生ではなかったと自覚していますが、それ以外のイベント、例えば牡鹿半島や鳴子温泉でのゼミ合宿は楽しく、貴重で充実した時間を過ごすことができました。ゼミ合宿は「時間よとまれ」というアルバムにもなり、大学生活の中でも特に大きな1ページになっています。

## 2. 大学卒業後は、秋田県知的障害者施設・・・

を経て秋田厚生連由利組合総合病院に心理判定員として入職しました。そこは本院と分院に別れていて、本院は一般診療科の入院、外来。分院は精神科の入院病棟（160床）になっていました。外来では精神科や小児科の心理検査や自律訓練法施行を中心に担当しました。分院では当時広く普及していた「生活療法」委員会に所属し、医師や看護師、ソーシャルワーカーらの他職種と共にその実践に当たりました。平成になると心理職等の資格が次第に出てきました。私も臨床心理士、精神保健福祉士、公認心理師を取得しました。平成6（1994）年には分院が廃止され新病院として統合されました。国の医療政策が収容型から在宅型へと変わり、緩和医療や予防医療の比重が増えたこともあって、心理職としての職域は、精神科デイ・ショートケア、緩和ケアチーム、脳ドック高次脳機能検査などにも広がりました。こうして通算40年にわたる病院心理臨床の任務を無事終えることができました。

## 3. 現在は、秋田県立大学本荘キャンパス・・・

学生相談室の非常勤カウンセラーとして勤務しています。その傍ら、病院在職中から担っていた県立高校スクールカウンセラー、秋田大学大学院臨床心理実習の非常勤講師も継続しています。

秋田大学大学院修士課程には東北福祉大福祉心理学科卒の院生が何名か在籍していた時もありました。

#### **4. 現在所属する秋田県公認心理師・臨床心理士協会の・・・**

会員数は140名ほどです。会員の中にはもちろん福祉心理学科OB、OGが複数います。秋田県では県からの委託という形で県内全域のスクールカウンセラー配置事業を行なっています。県内全中学校と公立高校、エリアごとの小学校にも随時対応できるようにしています。福祉や警察、精神医療に携わる有資格者もだいぶ増えました。ただ、協会の会員数という点では、全国的にみても東北に限っても少ないと言わざるを得ません。臨床心理士、公認心理師の認知度は秋田県内でもだいぶ定着してきたのですが、少しずつ増加している自治体や企業等からの派遣要請に十分対応できない現状もあります。そのような意味では秋田県で働く公認心理師や臨床心理士がもう少し増えてほしい、それが正直な気持です。

この度福祉心理学科設立50年という歴史が刻まれたことは、卒業生の一人として感慨深く、喜びもひとしおです。そしてその歴史を紡いできた人々に感謝しつつ、50年を一つの通過点として、今後も心理職を担う人材が世に出てくれることを心から期待しております。

#### **現在**

**秋田大学大学院**

**臨床心理実習非常勤講師**

**秋田県立大学本荘キャンパス**

**学生相談室非常勤カウンセラー**



# 大脳半球間機能差研究から矯正教育へ

## － 基礎研究から臨床への展開の経験からの示唆 －

50P 本田 稔

### 1. 学部時代の研究

大学生時代、卒業論文は、3年ゼミで師事した小松紘先生にそのままご指導いただき研究テーマとして、高度な領域であることを承知で、いわゆるラテラリティ研究、「脳波を指標としたヒトの左右大脳半球間の機能差」を選択した。

当時、文献がなく東北大に出向いて文献調査を行い、また、慶応大三田情報センターから欧米の関係論文などを入手した。実際に卒業論文に着手したのは大学2年の冬からであった。

その後の学生時代は論文に集中し、春・夏・冬休みも正月もなく論文に集中した。なお、データ解析や統計処理は4期生（52P）の武田悦夫氏の協力を得ました。

### 2. 進路選択そして職務経験

22歳時点では、大学を卒業したものの卒論に集中するあまり就職先はなく、1年間浪人することとなった。自分より先に法務省矯正局に拝命していた同期の高橋勝美氏から、矯正局関係でも性格検査や知能検査を担う部署があると紹介され、自分も1年後に受験することとなった。

23歳時に、法務省矯正局の試験に合格し、早期入省となり、宮城

刑務所に勤務することとなった。

25歳時に、分類審議室にて調査官（受刑者の知能・性格テスト等実施）を担当することとなった。また、この時期に、卒論を東北・北海道合同心理学会で発表することができた。

28歳時には、法務省矯正研修所仙台支所教官を拝命した。31歳時点で、青森刑務所保安課課長補佐として家族と共に赴任した。

その後、33歳時点で同教育課長、そして36歳時点で、旭川刑務所会計課長の職となり、北海道に転居しての活動を行うこととなった。

知能テストは、ほとんどが法務省自体で作成した受刑者専門の知能テストがあったが、WAIS、WISC、田中ビネー・鈴木ビネー等を使用した。

IQが低値であっても自立した生活ができないのではなく犯罪を犯して入所して矯正教育の対象となるケースも見られる。知的障がいや、精神障害を有する方の中では、医療刑務所の担当となってより適切な処遇が行われる場合もある。

他の検査として、性格テストは、クレペリン・Y-G・バウムテスト等も必要となったが、年間で数百名前後のテストの実施に関わったものと思われる。解釈に症例経

験が必要となる検査では、精神科医と協働で判断を行うなど慎重に対応を行った。

時期は相前後するが39歳時に札幌刑務所分類審議室上席統括官となり赴任したが、42歳時、頸椎の治療の影響から役所を休職せざるを得なくなり、重度身体障害者2級認定を受けて療養を続けていた。

その後、52歳時に、役所を辞職することになりました。

### 3. 矯正教育と心理学

筆者の経験から、矯正の仕事は、福祉と心理が求められる職場で、福祉大の心理学科は最適な大学・学部であり、今もこれからも求められるところだと思われる。

事実、宮城刑務所には6～7名の福祉大卒、東北少年院や少年鑑別所、青葉女子学園（女子少年院）にも福祉大の心理卒が勤務されている。

また、国家公務員上級（現在総合職）や中級に合格した福祉大生もあり、キャリア、上級幹部として働いておられる。

矯正は、広辞苑によると曲がったものを正すという意味があるようであるが、犯罪を犯し一度刑務所に入った彼らを更生させるのは大変な過程と言わざるを得ない。

酒による失敗は断酒会、覚せい剤等の薬物には精神科医による指導、性犯罪には臨床心理士によるカウンセリングなどが行われているが、予算や職員の数が少なく、その回数などが限られている。

例えば、受刑者500名でも希望

して指導に参加するものは10～20名程度であり、しかも強制的には行う訳にはいかないのが現実で、職員は歯がゆい思いをしている。

福祉心理学科卒に最適なのが矯正施設の刑務所・少年院・少年鑑別所である（ネットにも掲載）。

例をあげれば刑務所では分類という部署で、性格テスト・知能テスト・家族等調査を行っている。ただ、拝命（採用）されても直ぐに配属されるわけではなく、刑務官の現場での実務がないと仕事に結びつかないことから、最低でも2～3年の現場経験が求められる。

また、幹部になる道も広く、中等科を卒業すれば課長級待遇に、高等科を卒業すれば所長待遇になる。私は、25歳で中等科、30歳で高等科に進み、研鑽を積むことができたことは幸いであった。

### 後輩諸君へ

矯正教育は、社会において非常に重要であり、さらなる意味でのダイバーシティが求められている領域である。

心理学の基礎的訓練が功を奏したことも何度も経験しており、後輩諸君には矯正教育でも活躍の場があることをお伝えしたい。

### 付記

筆者の現在の状態は、脊髄急性硬膜外血腫（脊髄損傷）の後遺症から全身の麻痺・痺れ・疼痛が出現し、毎日オピオイドを大量に服用するも、その副作用から極度の

便秘症、そして不眠症で入眠剤の服用、さらには後遺症から神経因性膀胱炎で、24時間バルンカテーテルを用いることとなり、週1度の入浴もままならない状況となっている。

病弱で平成4年から入院が100回を超え、手術もかなりの回数に及び、担当医からはギネスものだと言われている。

現在は他の難病である大腿骨頭壊死（両股関節チタン置換）と難治性脊髄性疼痛と戦う日々である。

後輩諸君、そして同窓の皆様の  
ご活躍を楽しみにしております。

元 分類審議室上席統括官

# 教員免許状が役立ち、福祉心理学科卒で良かった・・

50P 本田 郁子 (旧姓 山内)

## 1. 福祉心理学科ができて、50年もたつという。

50年ということは半世紀である。

そこで、その半世紀もの間眠っていた、私の教員免許状が役に立ち、福祉心理学科卒で良かったという話をしよう。

私はこの9月から「先生」と呼ばれている。もちろん教師ではない。世の中に先生と呼ばれる職業は多々あるが、私の場合、小学校に併設されている放課後児童会の支援員である。(学童保育と呼ぶ地域もある)

私は大学を卒業してから20年間専業主婦で、その後40代半ばで仕事に出て、今年の夏まで短時間パートをしていた。70歳の定年までもう少しというところで、突然、閉店の知らせが…

## 2. さて、次はどうしようか、

と思っていたところで以前から息子夫婦に勧められていた児童会の仕事を真剣に考えることになった。

まず応募資格をチェックしてみる。

以下いずれか資格をお持ちの方

- ・保育士の資格
- ・社会福祉士の資格
- ・幼稚園、小中高校の教員免許状

まず、この時点で応募できそうだ。

・大学や大学院で社会福祉学、心理学、教育学、社会学、芸術学、体育学、又はこれらに相当する課程を修了した方、

## 3. ふむふむ、福祉心理学科だから

バッチリだ。その他に免許等がなくても類似する事業に従事していた経験があれば応募できる旨が記されている。

私の場合、応募資格に問題はないだろうが、年齢的に採用されるか不安があったので、履歴書の志望動機の欄にはびっしりと書いた。

## 4. 長い間子供用品を接客販売してきたので、

子供とのコミュニケーションには自信があること、前職にて各種ハラスメントや性の多様性の教育を受けていること、子供の発達障害の知識があること等、シニア世代が疎いような事柄も一通りの知識と理解があることを明記した。

結果として採用されて今日に至るのだが、そもそも福祉大を出て、更に教員免許の取得があったからこそこの話である。専業主婦と接客販売のパートしかやったことのない私にとっては、教員免許も心理学科卒という事実も不必要だったのではないかと、幾度も思った。

しかし、今、ここにきて大いに役に立った。

人生、いつ何時、何が起こるか、  
何が役に立つかわからない。

## 5. さて、68歳にしてほやほやの 新人の私。

常用支援員ではなく代用支援員を  
希望して週3～4日の勤務を始めた。

今年は発達障害の児童や、判定は  
されていないがグレーな児童が多い  
ということで、日によってはけんか  
の仲裁が仕事のほとんどだったりす  
る。だが、それ以外は児童とトラン  
プしたりオセロをしたり、話を聞い  
たりと楽しいことも多い。

何せ子供はかわいい。

## 6. しかし、実は一つ苦手なこと がある。

それは約80名の1・2年生の顔と  
名前を覚えることだ。

キラキラネーム絶賛発売中で漢字  
も読めない。名前だけでは男児なの  
か女児なのかもわからない。

むろん、名札は付けていない。

かなた、こなた、かなと、ひなた、  
ひろと、ひろむ、ひいろ、たいと、  
こいと、あいる、あいり、れあら…

さてさて、顔と名前を覚えるのに  
何か月かかることや先が思いやら  
れるが、しかし、それもまた楽しい。

現在 主婦、学童保育等支援員

# 私の卒業論文のテーマは「生き甲斐」でした。

51P 松川 弘

福祉心理学科創設五十周年おめでとうございます。

十月に開催予定のシンポジウムにあたり、卒業生有志からの寄稿文のお誘いがありましたので、学生時、先生方には大変お世話になりましたことから、少しでも恩返しになれば幸いと思い、寄稿することといたしました。

## 1. 私の卒業論文のテーマは「生き甲斐」でした。

老人ホームで入居者百人のみなさんに対して聞き取りアンケート調査を行い、それを纏めました。養護老人ホームの方々ですから、ある程度のコミュニケーションはできました。

「あなたの生き甲斐はなんですか」と聞きましたら、子供や孫などが面会に来てくれることとか、施設内でのクラブ活動や行事とか、食事や売店・お風呂等日常生活の中にありました。次に「夢は何ですか」と聞いてみました。「そんなものない」という回答が大多数でした。ひどい回答では、「養老院に入ってガンバコに片足つつこんでんだから夢とか希望とかはもうねえよ」というものです。

卒業後の就職先、児童養護施設の児童指導員をしていた時に、幼児や小学生に夢はなにか聞いてみました。そしたら、「野球の選手」、「ケーキ屋

さん」、「サラリーマン」、「お嫁さん」等ごく一般的に将来の自分像を話してくれました。その後生き甲斐は何かと聞きましたら、頭の中は？マークのようでした。生き甲斐という概念はまだ構築されていないようでした。

話を聞いているうちに、この施設の子供達の価値観は私とは随分違っていると思いました。例えば、人の物を盗むことの善悪については、普通、罪ですよ。ところが、彼らの認識では盗むことは悪くないのです。逮捕されることが悪いことなのです。何でそう思うのか聞いてみました。父親にその様に躰られたというのです。さらに、父親から、盗みを命令されており、これには逆らえなかったということです。

## 2. 生き甲斐、夢・希望を比べてみますと、

どちらも自分自身の心と行動の支えや生活の張合いになると思いますが、生き甲斐は、自分の過去の思い出の中にあり、夢・希望は、未来の自分が想像できる中にあると言えるんじゃないかと思います。

死ぬ直前に自分の人生が走馬灯のように流れて見えると言いますよね。他人にはそれが見えませんので、その人の人生が良かったかどうかは、

その人でないとわからないですよ  
ね。極論しますと、人間は最後に走  
馬灯を見るために生きるということ  
になりまして、それは思い出であり、  
そのために日々をどのように生きて  
いるか、それが良い思い出になって  
いると思うか、どう思うかが大切だ  
ということになりますよね。茶道の  
世界には一期一会という言葉があり  
まして、その瞬間は一回しかないの  
で、後悔の残らないように心を尽く  
してお茶を点ておもてなしをしなさ  
いという教えですが、全くそのとお  
りですよ。

### **3. 夢や希望という形で自分の人 生設計を子供心に構築して、**

それに向かって人生を築き、老いて  
人生を振り返り、自分で評価するこ  
とになるわけですね。

みなさん、みなさんの夢・希望、  
そして生きがいは何ですか？

私も人生の折り返し点は過ぎてし  
いましたが、これからの人生、自分  
自身の考えを持ち、悔いの残らない  
ように毎日を過ごしていきたいと考  
えております。

当時の所属サークル名 弓道同好会

現在

社会福祉法人 宮城福祉会理事長

東北のかいご共同組合 理事長

# 卒業してからもう45年ですか、

52P 大澤 隆則

## 1. 卒業してもう45年ですか

今では、孫4人になりました。大学中は、1年目憧れの文科系サークル「ろうあ者問題研究会」に入会するが、体質が合わず一年未満で退部する。ここで今の嫁さん(52E-211)と出会う。しかし、付き合いだしたのが4年の時で卒論の仕上げはこの人にやってもらった。卒論の手伝いは代々後輩が手伝ってもよいと言われていた。

2年生の時は、1年生の実験の助手として1年間バイトさせていただいた。ここで重要に思うのが卒論は、単位で取るのではなくしっかり実験等を組んでその結果のもと書いてほしいということだ。4年間学んだ集大成をしっかりとしていただきたい。自分がこの学科に学んだ証しを残してほしい。私の卒論はゼミ代表となり今でも図書館にあるそう。就職してから図書館にある私の卒論を読んだという後輩にあったことがある。なかなか良いものである。是非に図書館にある今までの卒論を読みその続きを深めていくといった感性で過去の卒論を3年の夏には、書き始めてほしい。そして、卒論を書くということは最終的な考え方を科学的にしてくれると思います。

## 2. 就職後に論文を書くことは

多忙さに紛れてなかなかできないものだが、私は旭川教育大学の古川先生が中心に行われていた特別支援教育学会に何年か投稿したことがあり教師、保護者、支援者が一堂に発表するもので面白かったしここで知り合った方々とは就職後も続いている方もいる。そして、現場で役に立つということだ。現場で推論を立て実践してもなぜかうまくいかないことがあるというより多い。そんなときにどこからやり直すのかこの方法が間違っていたのかが整理され記録に残る。現場にいればいるほどこの考え方は必要になるだろう。そして、この記録は同僚に伝わりやすいのだ感覚や体験論で支援を組んでいっても何かがあった場合その何かの分析は、かなり難しい。下手するとそこに想像や「なんでもやってみろ」といったものまで出てくる。

## 3. 就職は渡島学園の児童指導員

でした。しかし、腰を壊し退職。卒業後の私は、児童施設 児童指導員 日々小3の子供たちと遊びまわっていたが腰を壊し1年持たずに退職。

- ・ 白石児童相談所 児童指導員 非行児の夜間生活指導 人生の裏表の中にいる子供たちと戯れる。
- ・ 厚生施設生振(おやふる)の里重度斑。新規でここができるということで設立からかわる。初めて重度の自閉



症の成人とゴルフ場の作業をする

- ・ TEACCH、ジョブコーチ、グループホーム、ラップ棟について学ぶ
- ・ 生振の里 軽度斑 軽度の利用者の就労支援やGH、自立について学ぶ
- ・ 北海道大学 障害者の就労支援講師就任
- ・ 厚生施設 生振の里更生施設 施設長就任 おやふる 3代目施設長として就任すも5年後に理事会と支援方針のことで会わずに退職
- ・ 医学部発達障害者の就労支援
- ・ 石狩市教育専門家チーム特別支援教育に協力
- ・ ジョブコーチセミナースタッフ 9年間大妻女子大にてブコーチの基礎について講義を行う。
- ・ 札幌市発達障害相談センター おがる 就労相談員
- ・ 石狩市就労移行支援事業所 あるば 所長就任
- ・ 石狩市相談支援センター ぷろっぷ センター長異動
- ・ 60歳定年とともに退職、個人事業主 自立屋本舗隣、現在に至る。

自立屋本舗としては、有料の相談をしていたが、定期的な収入源にはならず組織に対してのコンサルテーションが良いと思い、比較的個別計画などが遅れて労働局からあった障害者就業・生活支援センターが良いと思い、接触のあった愛媛県の“なかぼつ”センターに案内を送り、現在3か所のコンサルを契約している。他年度単位で就労関係の研修をお受けしている。

今までの私が勉強したことや経験したことが若い職員の役に立つのはうれしいことである。

いろいろな経験を後輩につなげるのは良い経験でもあり、この私の記録もわたしのためでもある。そして、図書館にある先輩たちの卒論に一度は目を通してほしいものだ。

## 現在

自立屋本舗

代表

# 青年心理学の1冊を手にしたことから・・

52P

亀倉朱実

高校生の時、青年心理学の1冊を偶然手にしたことから、学生生活を送るならと選んだのが杜の都仙台でした。

あれから、半世紀近くが過ぎ去ってしまったとは、月日の経つのがあまりにも早いと思われまふ。

お世話になった先生方、友人達、たくさんの思い出が走馬灯の如くによみがえってまいります。

学生生活は静かな研究室の印象から始まったと記憶しています。

親元を離れ、私の4年間は自分だけの為にご過ごすことのできた唯一の時間でした。また自分だけのために学べることはこの上なく幸せなことでもありました。

心理学科は創設4年目で、また他の学科より定員が少なかったため、学生数が少なかったのは、運がよかったと思います。

研究室に通い、学ぶことの意味も分からない私は1つ1つ、先生方から丁寧な指導を受けることができました。

毎週、手作業の集計作業、レポートなど、今思うと驚きの声が聞こえそうです。

限られた情報で繰り返し失敗を重ねながらも新たな気づきは次につながることを得て、学びになりました。

沢山の情報があつという間に手に入る今とは、時間の使い方が全く違う4年間でした。しかし、振り返りますと、とても充実しておりました。

現在は、時間に追われつつも、今も続くキルトの生涯教育講座の開催、多くの方との出会いも楽ではないけれど楽しむことが大切な土台となっています。

今も物づくりを続ける私にとって、次につながる学びは、時に苦しい過程も残念な結果も受け入れることができました。

## 福祉心理学科の後輩の皆様へ

今の時代だからこそ、学生生活は自分を第一に大切に、突き進むだけでなく、時には立ち止まってしっかりと土台作りに目を向けてほしいと思います。

きっと、あなたの明日につながっています。輝かしい未来に幸あれ。

現在                      キルト講師  
生涯学習教室主催

# 福祉心理学科創設五十周年に寄せて

52P 小原 美鈴（旧姓 佐藤）

福祉心理学科創設五十周年おめでとうございます。卒業してから半世紀以上経過したのかと改めて感慨深く振り返っております。

## 1. 私がなぜ福祉心理学科を選んだのかな

と記憶をたどったら、二つ理由がありました。

一つ目は、小学生の私が遊びに行く度に、当時祖母の喜怒哀楽が激しく、おかしい行動が摩訶不思議で衝撃的だったことです。今でいう老人性痴呆（認知症）でしたが、老人の病気とボケ（認知症）を含めた老人心理について詳しく知りたいと思いました。

二つ目は、高校時代広まり始めた“奉仕活動、ボランティア”に興味を持ち、孤児院や養護学校、障害児施設へ通い、障害のある子供達と触れ合う中でその障害や心（心理）について知りたいと思ったからでした。

大学に入学した途端、高校時代の規律の厳しい生活から一気に解放され、新しい学友や先輩そして年齢の近い小松紘先生も巻き込んだコンパ等が今でも懐かしく最初に思い起こされます。しかし耳慣れなかった”福祉”と“心理学”の学問との出会い。東北大学から福祉心理学科を新設するために来られた多くの著名な教授達

に圧倒されながら、心理学は一つだと思い込んでいたので、様々な分野の心理学があることに驚きつつ、暗中模索でもがきながら勉強したことが思い出されます。自分でも大学を選んだ動機は優等生の答えでしたが、実際は授業についていくのがやっとでした。

## 2. しかし、当初学びたかった老人心理学は

故古旗安好教授、故北村晴朗教授のお二人から基礎と応用をユーモラスに教えていただき感謝しております。故北村先生には、大学卒業後も相談に乗っていただき、また老年心理学の授業へお招きいただいたりと、長きにわたり交流を持てたことは、大変光栄でありとても懐かしい思い出です。

卒業後の第一志望は宮城県の養護学校（現在の特別支援学校）の教員でしたが見事に落ち、親から再受験は認められず、第二志望の特別養護老人ホームに就職することにしました。当時45年程前の施設はとてまもなく、就職活動は困難を極めました。幸い夏休み中ボランティア実習をした施設からの紹介で、仙台市内の施設に就職しました。その頃、同僚は40歳代以上の無資格の家庭の主婦の方が殆どで、家庭介護の延長という

印象でした。

お年寄りと接する中で疑問や戸惑いがあった時、教科書では不可解なことは、故北村先生にお会いして相談できたことは大きな力と支えになりました。

### **3. その後、結婚、出産、スキルアップのために**

高齢者施設を退職し、社会福祉協議会に就職しました。当初は、町から委託の基幹型在宅介護支援センターにて家庭介護や在宅の一人暮らし及び二人暮らし高齢者の相談業務に携わりました。

時代の流れで、介護保険制度が始まり地域包括支援センターに配属され、更に地域の隅々まで地域住民の相談を受けました。それから人事異動で社会福祉協議会の法人の仕事に就き、地域福祉の根幹となる仕事に携わる機会を与えて頂きました。在職中の一番大きな出来事は2011年3月11日に発生した東日本大震災でした。いち早く町の命により災害ボランティアセンターを立ち上げましたが、勤務地は被害が少なく、沿岸部の壊滅的な被害に対処するため、ボランティアを募り6ヶ月余りボランティア活動をしました。全国から集まった多くのボランティアや他県の社協職員と共に活動し、刺激を受け多くを学んだのは大きな収穫でした。

### **4. 福祉の本来の対象者は、**

赤ちゃんから高齢者まで、健常者は

もとより心身の不自由な方までです。

これまで数えきれない方達と出逢い、関わらせて頂き多くを学ばせてもらったことは、今の私の糧となり、大切な財産です。これまで決して順風満帆ではなく、たくさんの失敗、四十代での転職、人との意見の違いに悩み、仕事をやめようと思ったこと数知れず、しかし、人と接することで心が傷ついた分、その何十倍も周りの人の助けや支えがあったので多くを得て、何とかやってこられたと思っています。

ある人が、人は皆幸せになるために生まれてきた、幸せになる権利があると言っていました。私は常に人に寄り添い、近づき過ぎず心地良い距離を保ちながら、耳と心を傾けて聴くよう心がけてきました。いつも不安そうな人には傍にいて“大丈夫ですよ”の声掛けをしてきました。「福祉」の「福」も「祉」も「しあわせ」という意味です。自分だったら、“こう対応されたら嬉しい、安心、ほっとする”ように接してきました。

### **5. かなり年の離れた後輩の皆さん、大学にはどんな憧れや目的を抱いて来られましたか？**

具体的に、「資格をとりたい」、「心理学に興味があった」、「教員になりたい」等など、目指すものを抱いてきた人は、それに向かってどんどん進んでください。途中で、悩んだら一休みして、他のものごとを見たり、先生や友人と話してみるといいですね。視野が広がってきますよ。

特に具体的な目的はなく、なんとなく入ってきたあなた。ゼロからの出発です。無限に未来が広がっています。色んなもののかじったり、友人や先生と話したり、アルバイトをする中でもヒントがちりばめられていると思います。

福祉心理学科を選んで入学されたのは、偶然ではなく、必然ととらえてみてください。大学で出会った人、出会った様々な学問、先生方、出来事、経験等これらすべてが、全て皆さんの将来に繋がっているものだからです。遠回りかなと思っても、道を間違ったかなと思っても、とにかく進んでいって下さい。最終的には辿り着くべき所に辿り着くと考えています。それが今の私の心境です。

大学の入学試験の時、隣り合わせになった人と45年以上お付き合いを継続しています。大学で学んだことは仕事の隅々で、多く沢山生かされていたと実感していますが、それと同じくらい友人との出会いは、私の人生において比重が大きく大切な宝物です。

これからもずっとこの関係が続けていきたいと思っています。

現在私は、在職中に知人友人と発足した子ども食堂を運営しています。

子どもとその家族を取り巻く地域の方やお年寄りの皆さんへ、月1回100食を中学生以下無料、その他は300円でお弁当を提供しております。

昨今の物価高で、運営は厳しいです。しかし、様々な人との出会い、多くの方の支援、協力や励ましをいただきながら、できる範囲で出来ることをやって、これからも社会と繋がっていきたいと考えております。

可能性のたくさんある皆さん、自分だけの未来に向かって羽ばたいていってください。

**元 社会福祉協議会事務局次長**

**現在 社会福祉協議会監事**

**介護保険介護認定審査会委員**

**子ども食堂運営**

# 徒然雑記『知的障がい福祉について思うこと』

## ー現場で四十三年間働いて伝えたいことー

つれづれなるままに、その日暮らしPCに向かひて  
心に移りゆく昔のことをそこはかどなく書きつくれば  
あやうこそたのしからずや

52P 白戸 浩雅

### 1. 北海道の片田舎の高校に在学中であつた私は3年の時に

進路について考えた。漠然と将来は教職か福祉職関係に進みたいとは思っていたものの、具体的には何一つ行動を起こすことなく、受験生なのにのんびりと構えていた。そんな時に本学の存在を知った。

資料に目を通すと「福祉心理学科」という6文字がとても気になった。当時、世の中では「福祉」というと「大変なお仕事ですね。」くらいの印象。そして心理学？何かよく分からない学問の掛け合わせで、一体何を学べるのだろうか？という疑問と期待。それに先の6文字には格好が良いというイメージ覚えた。不純な動機で受験願書の希望学科欄には「福祉心理学科」に○印を付けた。ありがたいことに「合格通知」をいただいた

### 2. 本学から徒歩十五分の4畳半に移り住み、

憧れのキャンパスライフが始まった。先ず始めに考えたのは「せつかく福祉大に入学したのだから、何かボラ

ンティア活動をしたいなあ」

そして、高校では学業優先で封印されていた「サッカーをしたい」の2点であつた。入学直後の良好な人脈の巡り合わせで、ボランティア活動は自閉症児に関わるサークルに入会して、子供の家庭訪問につながった。サッカーは同好会に入会。後にこの同好会は体育会のサッカー部に昇格した。かくして、私のキャンパスライフはサッカー4、ボランティア4、学業2の割合で4年間変わらずに経過した。今となつては「本業であるはずの学業が2割とはけしからん奴だ」と真顔で怒るが、当時、同科の仲間内では、心理学実験のレポートの未提出数の多い方が「粋」との錯覚が蔓延していた。私も同類であつたので心理学実験もそれ以外の教科も成績は散々であつたので、今でも留年の夢を見る。ちなみに「粋」な仲間も全員4年間で無事に卒業証書を手にして、それぞれのステージに向かって行った。

### 3. 私は地元に戻り障がい者支援施設に支援員として入職した。

創設二十五年の施設であったが、出勤初日の朝礼で「専門大学の新卒者として初の採用」と紹介された。その瞬間、在学当時、学業2割であった私は気恥ずかしさと、今後、求められるパフォーマンスを想像すると重圧を感じて直ぐに帰宅したい気分になった。しかし、直後に先輩職員の眼前で、怖いもの知らずの私は「福祉の原点は心の中にあることを忘れずに頑張ります」と見栄を切った挨拶したことを覚えている。

入職直後の指導（現：支援）は園生（現：利用者）に対しては集団的な画一处遇に近く、個の尊重より一集団としての安定が目的で、施設もしくは指導員（現：支援員）や制度の都合が優先されていて、感覚として施設事業者は園生（現：利用者）より上位に位置するイメージであった。園生（現：利用者）の個性や夢や希望の尊重はどこか遠いところにあったように思う。現場では作業が優先されていた。障がいの状態に関わらず、全ての園生（現：利用者）は何らかの作業に取り組むことが日課の大半を占めていた。よって指導員（現：支援員）も作業の指導をすることが仕事の中心で、基本的な生活習慣の指導（現：支援）は障がいの重たい一部の園生（現：利用者）が対象となっていた。

#### **4. そんな状況で約二十年が経過した頃**

平成十二年にそれまでは施設も指導員も「当たり前」と思っていたこと

が覆される改革が国より示された。

「社会福祉基礎構造改革」である。介護保険制度が始まった同年のことであった。このような改革は医療→介護→障がいの順番で実施されるというイメージを持つのは私だけだろうか。この時まではいわゆる「措置制度」で障がい当事者の施設等の入所は行政の判断（行政処分）で決定され、当事者側はそれを受け入れての対応であった。しかし、この改革では障がい当事者の自立を尊重しその選択を尊重する。具体的には「障がい当事者と事業者と対等な関係で、利用契約を締結した上で障がい福祉サービスを受給する。」「質の高い福祉サービスの拡充として、社会福祉法人以外でも入所施設を除いては各福祉サービス事業に参入を可能にした。」「効率的なサービス提供。」その他諸々。ここで文言使いも変わった。園生とか院生が「利用者」つまりお客様。指導が「支援」。この3年後にこの改革は「支援費制度」として具現化された。福祉は施しではなく、サービスという考え方に変わった。この時に社会福祉基礎構造改が何を示唆していたのかを、事業者が内部で十分に議論して振り返り、将来の事業方針をしっかりと定めた事業者と、過去を顧みることなく単純に法令に従った事業者では、この後の事業展開やサービスの質に大きく違いが生じたことは長い間の現実だと感じている。

#### **5. それから二十年の間、障害福祉**

## 関連法は

「支援費制度」→「障害者自立支援法」→「障害者総合支援法」と変遷を遂げた。法が変わる毎に、事業者は運営的にも支援現場的にも少しずつ窮地に追い込まれている感覚であったのは私だけだろうか。

法は予算分配のスケールなのかと錯覚してしまう。世の中には「人件費率」と言う数字が存在する。詳細は割愛して一般企業は多くて40%以下、障がい福祉サービス事業関連では70%を超えている事業所もある。裏返せばマンパワーそのものを主力商品としている業態なので、それ相応の人件費がかかるのは正であると思う。しかし、必要不可欠な人件費の一部は加算という形になっていて、さまざまな要件を満たした上で申請しなければ給付されない。なぜ、大切な人財に投じられる人件費が全て基本報酬単価に含まれないのかは、私の中では長きに渡っての疑問となっている。しかも、3年毎に報酬改定がある。その内容については年末に噂が流れ始め、実際に具体的な報酬単価額や各種加算の取得要件に加えて、ルールの変更が明るみに出るのは年を越えて2月頃である。新年度4月からの事業運営に多大な影響があるこれらの重要な情報を確認して対応策を講じ、新年度の予算や事業計画・人員配置等に取り込むまでの期間が実質たったの1ヶ月あまり。この時期は事業者にとっては心身共に疲弊してしまいう。困ったこ

とにこの疲弊感他への不平や不満も吸収して、慢性化してしまう恐れがある。前文に「サービスの質」と述べたが、この全体的な疲弊感が「サービスの質」の維持にも影響を及ぼしていると感じている。

## 6. 現在この業界の重大問題は

「虐待（含む身体拘束）」や「権利侵害」「意思決定支援の不備」等の事案が一向に無くならないどころか増加傾向にあることである。先に触れた社会福祉基礎構造改革の頃に、とくに意識改革されたはずの現場には、未だに「指導」という概念や「支援者優先」という意識が存在している。特に知的障がいのある人を支援の対象にしている現場には強い不安を感じている。毎年、厚生労働省より公表されている「障害者虐待対応状況調査〈障害者福祉施設従事者等による障害者虐待〉」と言う資料がある。この資料中に被虐待者の障害種別を割合で示した表がある。この表によると身体障害21.0%・知的障害72.6%・精神障害15.8%等々である。知的がい害者の割合が突出している。更に概算であるが、全国の知的障がい者数は身体障がい者数・精神障がい者数のそれぞれの4分の1程度と言われている。つまり具体的な被害率は知的障がい者が圧倒的に高い割合となっている。このことの原因は何だろう。同業者内でも「知的障がい者は被害にあったことを言えない」とか「物事に対する理解力が低いから」とかの意見を多く聞く、このこ



とを平気で語る裏側には、利用者の「意思（想い）」を無視した「支援者中心の支援」が横行しているような気がする。もし、「利用者中心の支援」が「本人の意思（想い）」を根拠として実践（提供）されていたなら、このような意見は存在しない。利用者は物言えないのではなく言わないだけである。「その表情や仕草から意思を感じ取れるような支援者であるべき」と思っている。40年あまりこの業界にいて分かったことは「利用者は優しい」支援者はその優しさに甘えてはいけない。そして、支援者として必要な要件は「体力・知識・センス」センスは素養であるが経験で十分に磨き上げられる。課題に対するアプローチとか、利用者への声掛け一つにしても支援者として良き人柄が「良質なサービス」の原動力となる。輝く支援者はこの人柄というセンスを備えている。昨今、業界では深刻な人手不足が問題となっている。しかし、プロである以上は人手不足を「サービスの質の低下」や「虐待や権利侵害事案発生」の言い訳にしてほしくない。コンプライアンス遵守のスケールを都合の良いように自作してはいけない。世の中の規則や需要には正しくしなやかに順応しなければならない。そして、利用者からいただく笑顔や些細な慰めの一言が1人の支援者を支え、その支援者が事業全体を支えているとい

うことは現実である。

## 7. 『本当に大切な物は目に見えない。』

どうか、目に見えない物、数値化できないことをプロとして心で目で見えて・聞いて・肌で感じて、この感覚を大切にする勇気を持ってもらいたい。利用者と支援者と事業者のパワーバランスは均等として、初めて関係者全てに幸せが訪れると思っている。

加えて仕事は楽しくあるべきだ。どんな職業においてもこのことに力を尽くす価値がある。

愚痴や不満ばかりの文章であったが、今、現役時代を振り返ると、辛いことは覚えていない。利用者や同僚・事業所からいただいた楽しい思い出ばかりである。

私が障がい福祉の道を選択したことや、その道を楽しく歩むことができたのは、本学での4年間の学びや経験が基となったことに疑いはなく心より感謝している。

元 就労継続支援B型事業所  
ワークつかさ 管理者

現 北海道知的障がい福祉協会  
権利擁護委員会 専門委員

# 心理臨床の一場面から

## ー心理療法のエッセンスを探るー

52P 菅原 憲

以下は、特定のクライアントの事例報告としてではなく、このケースを通して、心理療法の本質を考えるイメージモデルと捉えていただきたい。

### 1. ある日のセッション

クライアント 30代女性 夫と4歳の娘さんの3人家族

初回＊（ ）がセラピストの言葉

（今日はどんなことで？）最近、職場の様子が変で。私のことなんやかんやいろいろなところで、なんでそこまで言われるのだろうって。・・・おかしいことがいっぱいあって落ち着けない。何が狙いなのかもわからないし何で？って。

（安心できない）そう・・・私、みんなから心配されてるんです。夫とか、親からも大丈夫？って。病院行ったらという人もいて・・・私、病気ですかね。

（＊じいーっとThの顔を見つめる）  
（うーん、さてさて）（周りのそんな感じ、いつからなの？）うーん、3ヶ月位前からかな。なんで私のことそんなに職場の人が知っているんだろう。おかしいですよね。（おかしい、おかしい、怖いよ。気が休まらないね。）そうなんです。なんでかな。盗聴器？テレビで伝わって

る？（ほんと、どうやって）ですよ（こういう時って頭ごちゃごちゃするよね。）します。

（まずは、人と距離をとって一人の時間大事にして。信頼できる人以外はなるべく関わらない方がいいよね。）ですよ。ああ、1つ困ったことが。それも相談したくて。4歳になる娘、保育園に預けているんですけど保育園のトイレでおしっこできなくなっているんですよ。保育士の先生がなだめたり声かけたり、でもぜんぜん。園では一滴もしていなくて家に帰ってから、シャーって。間に合わずおもらし、の時もあって。これ、どうしてでしょうね。ストレス？治りますかね。

（家ではでてるんでしょう。大丈夫でしょ。ずっとこのままってないから。）そうですかあ。（いつから？）ああ、やっぱり3ヶ月くらい前かな。（娘さんも緊張してるのかもね。僕もトイレで他の人入ってくると止まっちゃうんだよね。）

へえー先生もですか（＊ようやく笑顔が）

（あることです。どうしますか。ここ通ってみますか。）そうします。

その方がいい気がします。私、病気ですかね。皆んなから心配されてて。病院行った方がいいとかありますか？

（うーん大丈夫でしょ。僕もそういう時あるしな。なんか油断できない職場とかあるんだよな。）ありますよね。

（まずは一人の時間大事にね。あと、焦らずどっしり。）はい。

### 3ヶ月後2回目のセッション

（\*一目で表情が自然で柔らかいことが見て取れる。）

（いかが）先生、すごくいろんなことがあってびっくりです。（ほう）家の隣にご家族が引っ越してきたんです。良いご夫婦だよってというのは聞いていたんですけど、どんな人かなって思ってたんですよ。である時むしように、むしようにですよ。ドーナツ作りたくなって、娘に手伝ってって言って、たくさん作ったんですよ。そしたらお隣りの子供さんが来て雪かきのスコップ貸してくれませんか。いいよいいよって貸して、あっドーナツ持ってってと。作りすぎたから食べるの手伝ってと。そこからお付き合いが始まって、またすごく良い家族なんですよ。いやあこういう縁ってあるんだなって思っ。他にも仲良くなった家族がもう一組できて、なんていうか人と会うの楽しい、になってます。その2家族だけですけどね。

（ドーナツの縁）そうなんです。

不思議ですよ。ねえ）前回から状況がガラッと変わってびっくりです。

（他に何か違ってきたことありますか）そうそう、前の時、娘のことって話しましたっけ。（ああ、なんでしたっけ。保育園で、えーと）おしっこができなくなって。（そうでした）出ました。（へえ！）次の日ですよ。先生のところに来た次の日、お昼くらいに保育園から電話あって、お母さんおしっこしてくれましたよって。（へー）びっくりでした。（ほんとびっくり）

## 2. まずは自己紹介

自己紹介が遅れました。卒業生52Pの菅原憲と申します。2005年より心理療法専門のオフィスを岩手県盛岡市で開設しています。開業前は精神科単科の病院で24年間臨床を積んできました。その43年間の臨床経験から得られた、というより「心理療法とは何か」と問い続けたプロセスの一端を、このケースを通して言葉に起こしてみたいと思います。

このケースは、当時東京大学附属病院の臨床心理士を経て東京大学医学研究科助教であった久保山武成先生（現在はルバーツ心理カウンセリング代表）とのコラボレーションセミナーで私が提示したものです。（蛇足ですが、コロナ禍での中断を経て、久保山・菅原が講師を務めるこのセミナーは不定期ではありますがこれからも開催していく予定です。）

セミナーの際にも様々な観点からこのケースについてディスカッションはなされたのですが、あらためて紙面に起こす機会をここにいただいたので、数ある臨床のエッセンスを、更に絞って考えたいと思いました。

さて、クライアントからは、この面接経過を公なものにすることの許可は得ているのですが、個人を特定されないための配慮のために念には念を入れて、クライアントを取り巻く現実的な状況を示す情報は全て削ぎ落としております。もう一つ加えて言えば、特定のクライアントの事例報告と捉えていただくよりは、このケースを通して、心理療法の本質とは、ということを考えるイメージモデルと捉えていただくとありがたいです。つまり事例性を超えた普遍性を語ってみたいのです。

### 3. 1回目のセッションで何が起きたのか

事例のプロセスは、言葉でしか表記できないのですが、今回はどんな対話が展開していったかよりも、このセッションのプロセスにどんな空気感が流れていたのか、「言葉に起こし得ないその何か」に想像を巡らせていただくことを願っております。そのためにはセラピストとしての自分が何に注力を注いだのかを語りたいと思います。

このクライアントに限ったことではなく、心理療法を進めていく中でセラピストである私が最も大事にしていることの

一つが「安心」「安全」という空気感を作っていくことだと考えています。殊にこのケースでは内的にも外的にも「安全感」が損なわれている状況が窺われました。ここは安全だ、という体験をしていただくことが最優先だと見立てました。

安心安全ということを実現していくために必要なことは、理論的にも技法的にも様々な方法論が提案されていると思います。私がどういうスタンスをとっているのか、まずは普段の臨床に拡大して述べていきたいと思います。

私の場合は、クライアントに同調し、クライアントになっていく、ということに関わりの中心に据えています。

クライアントにとっては、「他者であるセラピスト」ではなくてもう一人の自分が傍にいる、というような体験になっていること。それは理想ではありますが、その理想に近づけることにエネルギーを注いでいる。それが実現していれば、恐らくですが呼吸や脈すら同調しているのでは、と想像しています。(客観的に測定したことはありませんが)

言い方を変えれば、「他者」という存在は常にクライアントを脅かすものになり得る、と言えるかもしれません。

さて、同調のその先にもう一仕事が必要です。それは、セラピスト自身が自分を整えていくこと。脅かされているというその体験を自分のことのように感じながら、更にそういうセラピスト自身の体験を整えながら安心、安全感を取り戻し

ていくプロセスを自分の中に発動させていく。医学的な文脈を借りれば、セラピストが、自身を発症させて自身を治療していく。

それでは何故セラピスト自身への治療なのか。それはセラピストがクライアントを治療しようとした瞬間から、セラピストが（クライアントにとって）他者化してしまうからです。だから、セラピストが治療の対象にしているのはセラピスト自身、もっと適切に言えば、セラピストの内的なクライアントイメージに対して、治療的介入をしていくということが重要となります。

このスタンスがクライアントを脅かすことなく心理療法というプロセスを促進していくことだと経験的に実感しています。そう考えると、セラピストとクライアントは関わっているようでいて関わっていない。むしろそれぞれが同じ場には居るけれどそれぞれが同じ治療のプロセスを勝手に進めている。イメージとしてはそんな感じです。

では、なぜセラピストの内的治療プロセスが発動するとクライアントの内的治療プロセスが動き始めるのか。このことに関してはいまだに裏付けの根拠を示すことができません。脳科学的にはミラーニューロンという現象が関連しているのかもしれませんが自分にとってはまだ未知です。安心、安全という体験が臨床上重要、とされているのは、神経学的な見地からポリヴェーガル理論で裏付けられ

るようですが、研究に疎い私の守備範囲を超えています。

臨床家という自分の守備範囲に戻ってこの現象を考えると、心理療法の場にトランス空間が生じている（日常の意識状態と違う変容が起きている）のは間違いないところでしょう。その意識変容が、クライアントだけでなくセラピスト側にも生じているということは、「関係性という視点」を入れ込んだ催眠領域の臨床的見解からも指摘されていることではありますが、それでもトランス誘導の主体はセラピストの側にある、という文脈（セラピストがクライアントをトランスに誘う）が多数派のような気がします。

私の場合は、クライアントをトランスに誘導するのではなく、あくまで、セラピスト自身をトランスに入れていくということだと考えています。最も、そのスタンスも私のオリジナルということではなく、古くは、フロイトが「平等に漂う注意」という概念で説明していることに通じるかもしれません。セラピスト自身をトランスに入れていくということの、方法論の一つがクライアントに同調していくということでもあると思います。（フロイトがそんなことを言っているかは知りませんが）

さて、ある臨床のエッセンスが臨床家同士に共有されているということが、多くのクライアントの利益につながるのは自明の事だとは思いますが、セラピストがクライアントになっていく、というこ

の方法論がどうしても少数派らしいのです。自分では名人芸とは思ってはいないのですが、でも他の臨床家が使えなければどうにも役立たずだなあとも思ってしまいます。

しかし私のヴァイジーで同じ芸風の臨床家が存在しているのも確かです。そのヴァイジーの在り様や、自分自身の在り方を振り返ると、「自分という主体」の希薄さが特徴なのでは、と思い至っております。そういうタイプ、「自分」がいないあと思っている臨床家にこのスタンスは向いているかもしれません。カッコよく憑依型セラピーと呼んでおきます。(笑)

まだまだ臨床のエッセンスは語り尽くしておりません。例えば、トランスという現象一つとっても、他にも様々な要素があります。(例えば現実水準の価値からの離脱、表に現れていないことへの感知が鋭くなっていくこと等)

この場では、臨床の数あるエッセンスの一つ(しかし外せない一つ)である「安全感」にフォーカスしてみたということでした。

## 現在

心理臨床オフィスすがわら

代表臨床心理士

# 目の前の仕事を面白がって

52P 岡部しのぶ（旧姓 山口）

福祉心理学科創立50周年、心よりお祝い申し上げます。

## 1. 卒業論文から学んだこと

大学時代を振り返ってみると、仕事に向かう姿勢を作ってくれたのは卒業論文だったと感じています。3・4年生は、小松紘先生のゼミに籍を置き卒業論文のご指導をいただきました。私は、卒業論文のテーマを『聴覚障害者の対人認知に関する一考察—表情写真と情報文の組み合わせによる感情認知—』として、「聴覚障害者の方は、聴力を補う力として人の表情を読むことが優れているのではないか。」と仮説を立てて実験に取り組みました。演劇経験のある友達にモデルになってもらい、「喜び」「悲しみ」等8種類の表情の写真の写真を何度も撮り先生に実験の許可をもらいに行きましたが、その写真には妥当性の問題がありなかなか許可が出ませんでした。当時は写真店に持って行き現像してもらって初めてどのような写真かが分かるという時代でしたから、表情写真を撮るだけでかなりの時間がかかっていました。卒業できないかもしれないという不安がよぎる中、ギリギリのところでは許可が出て実験にこぎつけ、卒業論文締め切り時間の1時間前に提出することができたのでした。そこで学んだことは、「計画や準備には納得いくまで時間をかける。」「妥協しない。」という

ことでした。信頼性、妥当性のある結果がでるように条件設定に取り組み、試行錯誤を繰り返して最善の方法を取ることが大事であることを身に染みて知ったのです。

## 2. 教員に採用されるまで

卒業後は、小学校などの講師をしながら教員採用試験を受けました。言い訳になりますが、明日の授業準備に必死で採用試験の勉強もままならず、「受験しては不合格」を繰り返していました。ある日、尊敬する先生から「本当に教員になりたいのなら、1年間仕事を休んで勉強してみたら？」とアドバイスを受け、茨城大学教育学部特殊教育特別専攻科（1年課程）へ入学しました。4月から7月末の採用試験まで、大学の授業以外の時間のすべてを勉強に当て試験を受けた結果、無事合格しました。この一心不乱に勉強をするという経験は、自分はこんなに集中して勉強できる人なんだと自信につながりました。また、専攻科では、障害児教育の学び直しができ、有意義な時間でした。まさしく、「急がば回れ」です。

## 3. 教員になって

1年目は副担任、2年目から担任となり、公務分掌のチーフも任され、充実した日々を過ごしていました。養護学校の

場合、学習指導要領を基に児童生徒に合わせた学習内容を考えて教材などの授業の準備をするのですが、児童生徒の顔を思い浮かべながら教材を作っていく作業はワクワクし、更に、授業で児童生徒が意欲をもって取り組んでくれた時や「できた」と笑顔を見せてくれた時の達成感は何とも言えません。その一方で、勉強不足を痛感し、このままでいいのだろうかと考えていた所に、茨城大学教育学部附属養護学校への異動の話があり、思い切って異動しました。年3回の教育実習生の指導、年1回の公開研究会など多忙でしたが、個に応じた指導と教材づくりに力を注ぐとともに教育実習生を指導することで逆に学ぶことも多く刺激のある6年間を過ごしました。

県立の養護学校に戻り、待っていたのは研究主任の仕事でした。現在では、当たり前になった「個別の指導計画」、「個別の教育支援計画」の内容の検討、フォーマットづくりなど、新しいことに挑戦する面白さを仲間と共有しながら過ごし、国立特殊教育総合研究所（現国立特別支援教育総合研究所）の内地留学にも行かせていただきました。また、40歳代後半からは、中学部主事、教務主任、教頭、茨城県教育庁特別支援教育課指導担当課長補佐、校長の仕事を務めさせていただきました。

#### 4. 教育行政の仕事

教頭から突然の教育委員会への異動は、カルチャーショックの毎日で、文部科学省や県の教育施策、議会对応など知らないことばかりでした。2007年に「特別支援教育の推進について（通知）」が文

部科学省初等中等教育局長から出され、特殊教育が特別支援教育に転換する時期でした。また、知的障害の学校勤務しかない私は、他の障害について一からの勉強が必要となり指導主事が説明してくれるのを黙って聞く日々が続きました。しかし、6か月が過ぎたある日、いろんな内容がつながって理解できるようになったのです。視野が広がって、自分には向いていないと思っていた教育行政の仕事が面白くなり、特別支援学校の授業改善、特別支援教育コーディネーターの育成、小中学校、高等学校への特別支援教育の理解啓発などに取り組むことができました。（養護学校は、特別支援学校と名称変更）

#### 5. 校長として心掛けたこと

最後の5年間は2校の校長を拝命いたしました。校長として心掛けたことは、「ビジョンを明確にする。」「分かりやすく何度でも（しつこく）伝える。」「いつまでに誰がやるかを明確にする。」「取り組みをフィードバックする。」ことです。そうすることで、生徒や先生方が主体的に取り組んでくれ学校経営のやりがいを感じました。例えば水戸高等特別支援学校では、「海外修学旅行（台湾）」を目標に掲げ、2年間かけた先生方の用意周到な準備と旅行会社の協力、合わせて交流を快諾いただいた台湾の高校の皆様のおかげで実現することができました。台湾の文化に接した生徒達の感動や海外修学旅行をしたという達成感は生徒一人一人の自信につながったと確信しています。



## 6. 学生の皆様へ

私の場合、新しい仕事が来た時に、「不安」と「面白そう」の二つの気持ちがせめぎ合います。考えていくうちに面白そうの部分が増え、ときめいている自分がいて無謀にも引き受けてきました。そして、卒業論文での学びを生かし、引き受けたからには妥協しないで一生懸命に仕事をする事で、次のステップの仕事が来るという循環が生まれていたのだと思います。私は、幸運にもいろいろな立場でいろいろな仕事をさせていただきました。その立場だから見える景色、その立場だからできる仕事がたくさんありました。

学生の皆様は、自分の気づかない可能性をたくさんもっています。自分で自分に限界を決めないで、面白そうと少しでも思ったら様々なことに挑戦してほしいと思います。たとえ失敗してもその経験は積み上がります。困難な状況を味わったらチャンス！自分の底知れぬ力が現れますよ。

今、教員の仕事の大変さが話題となり学生からの人気は低下しつつありますが、

とてもやりがいのある仕事です。一緒に泣いたり笑ったり感動したりしながら、子供の成長を支援したり見守ったりすることができます。教員も児童生徒の姿を見て刺激を受けたり達成感を味わったりしながら働くことができます。働き方改革も進められており、超過勤務時間月45時間以下の設定、有給休暇取得の推進、育児休業などの福利厚生もしっかりしています。学校は、児童生徒に向かい合える情熱のある人を求めています。学生の皆様、将来の仕事に教師という選択肢も入れていただければ幸いです。

最後になりますが、ご指導いただいた諸先生方に感謝申し上げますとともに、福祉心理学科の益々の発展と後輩達が明るい未来を切り拓いていくことを節に願っております。

### 現在

茨城県立北茨城特別支援学校講師

### 元

茨城県立水戸高等特別支援学校長

# 道を拓く

～心神喪失者等医療観察制度における社会復帰調整官の経験から～

54P 長船 浩義

## 1. はじめに

福祉心理学科創立50周年を心よりお祝い申し上げます。

私は昭和54年に入学し、福祉心理学科に籍を置き貴重な4年間を過ごしました。当時の教官であった北村晴朗先生、小松紘先生の熱心な指導を受け、また友人や諸先輩にも恵まれ充実した学生生活を送ることができました。この度、50周年という節目の寄稿集に掲載いただけることに感謝を申し上げます。

さて、卒業後、私は昭和58年4月から平成16年の3月まで函館市の保健医療福祉行政に携わっておりましたが、その後、「心神喪失等の状態で重大な他行為を行った者の医療及び観察等に関する法律(以下、「医療観察法」という。)」の成立に伴い、法務省の保護観察所に籍を置き社会復帰調整官として医療観察法の施行及び運用に長きにわたり携わってきました。当初、医療観察制度は難産の末に成立と、いろいろな意味で逆風の中からの船出でありました。その際、幾度となく福祉心理学科で学んだことが基礎となり様々な場面で諸先生の教えが役立ってきたことから、いくつか紹介をさせていただきます。

なお、本稿の医療観察制度の成立や施行等の在り方に関しては20年の経験からの私見であることを申し添えます。

## 2. 医療観察法の成立・施行

我が国の医療観察法は、平成15年7月10日、第156回(通常)国会

において可決成立し、平成17年7月15日に施行となりました。医療観察法の目的は、精神の障がいのため重大な他害行為(殺人、放火強盗など)を行ってしまった人が、適切な医療を継続して受けることで、病状の改善を図り、不幸な事態を繰り返すことなく社会復帰していくことを推進することにあります。

しかし、本制度は、触法障害者の処遇について刑事司法の側からも精神医療の側からも制度上の不備等を長らく指摘されて末に、法務省と厚生労働省が平成13年1月から、重大な犯罪に当たる行為をした精神障がい者の処遇の在り方を巡ってさまざまな角度から議論を始めました。そのような中、同年6月に発生したいわゆる大阪池田小児童等無差別殺傷事件をきっかけに、この問題に対する社会的関心が一層高ま

り法案作成が進められました。また、医療観察法の成立までの道のりは険しいものでした。永年司法と医療のはざまに取り残されてきた問題を取り上げたもので、「不確実な危険性予測によって精神障がい者を拘禁することは人権侵害」といった意見や保護観察所の関与事態を疑問視する意見がありました。様々な反対意見がある中で、本制度の対象となる方への

適切な医療を確保し、その社会復帰の促進を目的とするものであることを貫き成立に至りました。

### 3. 医療観察制度における処遇の流れと社会復帰調整官の役割

保護観察所で医療観察制度に係る業務に携わるのは、精神障がい者の保健及び福祉等の専門家である「社会復帰調整官」です。平成16年4月に更生保護官署職員として新たに56人が全国の保護観察所に配置されました。現在は200名を超えています。保護観察所における社会復帰調整官は、当初審判における「生活環境の調査」から、入院中における「生活環境の調整」、「精神保健観察」を含む「地域社会における処遇」に至るまで、本制度の処遇に一貫して関与する立場にあります。特に地域社会における処遇では、「医療」、「精神保健観察」、「援助」という、処遇の三本柱が適正に実施されるよう関係機関と協議して処遇の実施計画を定め、処遇の統一方針と役割分担の明確化を図ることとされています。各機関はこの実施計画に基づいて処遇を実

施することとされ、保護観察所は実施計画が有効に機能するよう、関係機関の協力体制を整備し、相互の緊密な連携の確保を図ることとされています。

### 4. 様々な反対意見がある中、どうして社会復帰調整官の道を選んだのか

大学を卒業してから北村晴朗先生のある論考を間接的に入手したことから全国レベルの新政策の専門官にチャレンジすることを決めました。そこには、北村先生がドイツの哲学者ニーチェの詩句に関して触れています。「哲人教えて曰く、己の立てるところを深く掘れ。其処には必ず泉あらむ。」私なりに要約すると次のとおりです。

考えてみれば社会復帰調整官になることを選択し得られた職業にしても、そこは多少とも限定された場所であり、自由気ままに他の道に移れるわけではありません。あるものを選んだということは、既に、他のものを得る道を捨てたことにもなります。したがって、「己の立てるところ」はみな限定された多少とも狭い場所です。ところが、どのような場所でも、どのような環境でも固定した性質を持つものではなく、私たちの対応の仕方によって様々に変容し得るものと考えます。環境は、人間の在り方で大きく変わるものであり、人間の態度と行動の仕方でも大きく変えることも可能です。荒れ地を耕し花や野菜を植えて耕地に変える道があります。そこに住む人々による多年の営みの結果です。環境を変えるもう一つの道は、深く掘って泉を見いだすことで

す。泉が湧き出ることによってその土地は一変するでしょう。そこで大切なことは「その場を深く掘るという努力が要求されること」であります。このことは、私が選んだ社会復帰調整官のおかれている環境であっても、医療観察法対象者のおかれている生活環境であっても己の立つところ、又は「汝の立つところ」は現在の生活の場であり、境遇であり、状況であり、環境です。そこを深く掘ることによって例外なくよい泉を見いだすことができる。どんな場所であろうとも深く掘るという努力を惜しまなければ必ず良い泉を見いだせること考えます。この格言は、まず外に理想を求めるのではなく、脚もとの大地に潜む価値の発見です。そして、よき泉は遠くにあるのではなく脚もとの大地にある。そしてそれは、深く掘ることによって誰にでも発見できるものと信じていただきたい。地道な活動の場においてもよき泉は潜んでいるということです。

## 5. 生活環境を知ることが処遇において重要であること

社会復帰調整官の業務には、地方裁判所の求めに応じて「生活環境の調査」を行うことと、指定入院医療機関から地域処遇に移行する対象となる方に「生活環境の調整」といわれる業務を行います。生活環境を知るための視点を黒田正典先生の著書「新版心の衛生・苦悩の分析とその解決」からご示唆をいただ

きました。

黒田先生は「人間は、高等動物として、精神衛生が構造化の働きかけをする以前に、相当に複雑な構造をすでもっている。」これを人格構造という。

人格構造をもった人間が、環境の中において生活しているのである。

この人格構造と環境が、いったいどうなっているであろうか、それをまず知らなければ、われわれは他人をよく救うことはできないであろう。しかも、この人格構造も環境も時間と歴史の中に生きている。これらを知らなければ、他人救済も十分に遂行できないであろう。人を救うには、行動の発生する原因を知らねばならぬ。そのためには二つの仕事がある。

行動がどんな部分部分から成り立っているか明らかにしてゆくことである。

いろいろの部分が、お互いに関係しあいながら活動する様子を明らかにすることであると論じられており、このことは人格構造と生活環境を知る必要性について述べられています。私としては処遇の対象となる方の心の世界は何から成り立っているのかを考える基礎となりました。

## 6. 福祉専門職の視点として大切なこと

北村晴朗先生は、1979年に「転換期の社会福祉論」第7章「福祉心理論」の中で、福祉心理学について詳述されています。

人間は至上の価値と尊厳をもつもの

であり、心理学も当然人間の尊厳と福祉の増進と無縁ではない。心理学を職とする者は、個々の人間の尊厳と価値を信じ、人間が自分と他の人々の理解を増進させることを仕事とする。

その際、その援助を求める人々の福祉を守らなければならない。さらに応用心理学になると、社会的貢献や福祉の増進を目的とするものである。

心理学はすべてその本質上、人間の福祉を守りこれを増進させることを最後の目的にするものである。福祉の擁護と増進を眼目とする福祉心理学が独立の分科として成立することは当然のことであり、その必然性は心理学自体のなかにはじめから存在するものといえるのである。要約すると心理学の最終的目的は人々の福祉=幸福であるとする考え方になる。さらに、この福祉あるいは幸福の状態を、各種環境の中にいる人が、その環境に対する適応の程度の問題と捉えている。「望ましい環境」について考慮し、それへの適応の失敗の解消方略を検討することが福祉心理学の課題であると論じられています。

社会復帰調整官の業務につく基本姿勢として、先生が述べられている「個々の人間の尊厳と価値を信じ、人間が自分と他の人々の理解を増進させることを基本に据える」ことが大切であることを学ばせていただきました。

最後になりますが、人間の望ましい

生き方として欠くことができないのは、望ましい生き方がそれぞれの人に可能になるように、後進の人々を育成し、指導し、さらには支援すること、さらに広く支援を必要とする人びとに対して支援を与えることであろうと考えます。福祉心理学科で学ぶ後輩諸君には、学科の教えに触れ、それぞれの道を拓き有意義な人生の旅へ挑んでほしいと切に願います。

#### 参考文献

- ・ 更生保護学辞典 日本更生保護学会編 成文堂
- ・ 新版心の衛生 苦悩の分析とその解決 黒田正典著 共同出版
- ・ 転換期の社会福祉論 東北福祉教育研究会編 学陽書房

#### 元

東京保護観察所首席社会復帰調整官

#### 現

更生保護法人函館創生会

更生保護施設巴寮施設長

# 鉄格子は福祉？ 少年院・刑務所の支援

54 P 又地 浩一郎

はじめに

54 P から矯正の現場に二人が入っています。ひとりは未だ現役です。私は4年前に60歳で退職しました。その後、障がい者就労支援事業B型施設で生活相談員、新潟市の生活困窮者支援相談員を務めて、昨年10月に職を引きました。

法務教官として務めた36年間の仕事を終えて、振り返って思うことは「刑事政策は福祉領域」だということです。この文章は、2024年9月27日に新潟市秋葉区の「障がい福祉施設連絡協議会」の研修会での講演内容、また、同年10月19日に東北福祉大学50周年シンポジウムでのパネリストとしてのスピーチをまとめたものです。

障害者福祉の現場に立たれている方々や、福祉心理を研究する諸賢、学生諸氏が刑事政策に関心を持たれ、非行少年や受刑者の更正に貢献していただけることを願って寄稿いたしました。

## 1. 少年院

少年院は、法務省矯正局が所管する施設です。敷地にはフェンスが回されドアは鉄扉二重ロック、静脈認証、何より鉄格子。しかし未成年用の刑務所ではありません。未成年者用の刑務所は少年刑務所といって別にあります。少年院は、入院してきた生徒たちに教育的・福祉的支援をする施設なのです。

少年院は全国に45施設あります。概ね12歳から20歳までの非行少年を収容します。もうすぐ20歳になるという少年もいます。(そういう少年の場合、教育期間を確保する必要があるため、決定の日から1年間は収容継続をすることができます。(ほかにも収容継続が必要な場合もありますが、ここでは詳しく述べません。))

私が勤務した新潟少年学院では20歳を少年院で迎えた少年のために成人式が行われます。保護者の他、長岡市長をはじめ多くの来賓をお招きしお祝いしました。

イメージは寄宿舍のある学校です。

教室棟があり体育館がありグラウンドがありプールがあり、寄宿舍(寮)があります。校歌にあたる「院歌」もあります。毎朝男性2部合唱で堂々と歌われます。

中越地震後に建て替えられたので、まことにきれいでアカデミカルな雰囲気建物です。地震前は、フェンスさえありませんでした。

そんな中、グラウンドに出てサッカーをし、冬はアスレチックスキーをし、市営スキー場でアルペンの訓練をし、野外訓練で奥只見へ1泊キャンプに出かけ、夏には柏崎刈羽原発に隣接する海水浴場に臨海訓練に出かけました。

関東管区の少年院が集まり、合唱コ

ンクールがあり、バレーボール大会があり、剣道大会がありました。

現在は社会の耳目が厳しく、少年事件への厳罰化を求める声も小さくありません。

そのため、施設外の行事は少なくなりましたが、保護者を招いての体育祭、音楽祭などは恒例で開かれています。

## 2. 保護処分

未成年者の犯罪・非行は、例外なく**少年事件として家庭裁判所**に送られます。裁判所ではありません。家庭裁判所では**少年審判**が開かれます。**少年審判は裁判とは違います**。傍聴は許されません。

そこで審議されて「**保護処分**」という処分が決定されます。(処分がない場合もあります。(不処分))保護処分はあくまでも少年の健全育成を目的としています。刑罰ではありません。です。前科もつきませんし、当然刑期もありません。履歴書の賞罰の欄に「保護処分歴あり」と書かなくても文書偽造にはなりません。保護処分には何種類かありますが、そのうちのひとつが「**少年院送致**」です。

保護処分がそぐわないと家庭裁判所が判断した場合(社会的な影響が大きい事件など)は検察官に送致されます。その後、検察官により起訴され成人事件と同じ扱いを受けることになります。そこで刑事処分(懲役や禁固)を受け他場合、前述した少年刑務所に送られ

ます。

## 3. 刑事処分

成人の犯罪は刑事事件として裁判所に送られます。そこで刑事裁判を受け刑事処分が下されます。

刑事処分は保護処分とは全く違います。刑事処分というのは犯罪行為に対する社会的な非難や報復を示すことを重視しています。それ故に刑事裁判は一般の傍聴が許されます。処分が決定すると実名が公開され、懲役や禁固の刑罰も公開されます。社会の目にさらされるということです。厳密に言えば履歴書の賞罰欄に刑事処分歴を書かないと文書偽造になります。

実名が公開されるということは、社会から「あの野郎か!」と言われること、刑が公開されるということは、「ざま〜見ろ!」と言われることです。大変残酷な一面を持つわけです。

少年事件と成人事件は完全に区別されています。少年事件は刑事裁判ではなく少年審判に委ねられ傍聴というのがそもそもありません。少年は発達過程にあり教育可塑性が高い。それ故に、社会の報復感情から保護し、健全育成を確保する仕組みになっているわけです。

まとめると

- ・少年院は、保護処分を受けた少年を強制収容し、教育的・福祉的支援を行う施設。

・刑務所は、懲役刑、禁固刑を受けた人を強制収容し、罰として「閉じ込めて」「報酬なしで」「仕事をさせる」ための施設。といえます。

#### 4. 少年院教育の原則

少年院教育（矯正教育）の原則というのが法律で定められています。法律で決められているというところが、普通ではないところです。

普通こういうのは、会社の理念とか教育理念として額に貼られて飾られるものだと思いますが、強制収用をしている、自由交通権という基本的人権に強力な制限を加えている、そのために、法律によって非常に厳格な執行を求められているということです。

少年院法第15条第1項 「在院者の処遇は、その人権を尊重しつつ、明るく規則正しい環境の下で、その**健全な心身の成長**を図るとともに、その**自覚に訴えて改善更生の意欲を喚起し、並びに自主、自律及び協同の精神を養う**ことに資するよう行うものとする。」

注目していただきたいのが、「自覚による更生の意欲喚起」、「自主、自律、協同の精神を養う」の2項です。

#### 5. 自覚、共同、自主

少年は、世間との関わり（社会生活）の中で、自分が「**したいこと**」…を見つけられていません。

自分が「**したくないこと**」…を決められてもいません。

これを自覚がない状態と私は考えてきました。

彼らと話すと、彼らは世間の暮らしの中で自分が「**したい！**」ことがない、自分が「**したくない！**」ことを決められていないのだなと気づきます。

「何かの役に立とう、と思ってやっていたことはないか？」

「いつも、けつもちやってました！」

暴走族最後尾を走り仲間を逃がす役目です。まだいい方です。言葉になって出てくるだけ。

「迷惑にならないようにやめておく、と決めていたこと何かないか？」

「薬には手を出しませんでした！」

組に迷惑はかけられないという話です。これとてまだしもです。つまり「**したい**」「**したくない**」という**自覚がない**訳です。

少年院という鉄格子の中での暮らしでは、自然発生的に**協同体**ができあがります。「**自分たちの寮**」では自分たちのことは自分たちで解決しなければならない。**自主的に**物事に取り組むしかない。教官は一緒になって考えてくれるが、権威による指示命令は、院内の非違行為に対してしかない。

そのような日々の中で、社会生活の中で見つけられずにいた

「**したいこと**」「**したくないこと**」が浮かび上がってくるらしいのです。

「**しなければならないこと**」を「**俺がやる、俺がやりたい！**」と感じるようになるらしい…



「してはいけないこと」を「俺は嫌だ！俺はやらない！」と感ずるようになるらしい…

**自覚が生まれてくるらしい**

そして何か役にたつことを見つけ勝手にやり始める。決められた自分の役割でもないのにです。

例えば、彼はトイレ掃除の当番です。「みんないくら言ってもスリッパをそろえてくれない！」と憤っています。憤っていることが生きづらさの原因です。乱れたスリッパではありません。

「どうしたい？ 又地に怒鳴りつけてくれって？」

彼はいつの間にか、誰にも何も言わず、勝手に自分でスリッパをそろえ始めます。几帳面にきっちりと…。今週はもう彼は当番ではなくなっているのに…

玄関の靴箱も、自分の上下左右の靴をそろえ始めます。誰にも何も言われていないのに…やらなくても誰も何も言わないのに…罰はないのに…

トイレのスリッパは定期的に起きる事件です。いつか彼は退院し、スリッパは乱れ始める。誰かが気がつき憤る。そして誰かが黙ってそろえ始める。

自分が過ごしている「今」、「ここ」は、「自分」が、「誰か」がやっているから成り立っている。「自動的に提供されるサービスなどない！」ことに気がつき始める。自覚、共同、自主の精神が、鉄格子の中で育まれていきます。

## 6. 少年の認識（他律的存在）

少年院では少年のことを生徒と呼びます。少年は職員のことを先生と呼びます。少年も職員も胸に名札をつけています。

刑務所では職員は名札をつけません。受刑者に職員の名前が知られるのは危険だということです。

そのため受刑者は職員のことを「担当さん」、親近感を示すときには「親父（おやじ）」と呼びます。「うちの親父」というときは、自分が勤める工場の担当刑務官のことです。彼らの信頼感の表現なのでしょう。

私の場合は、刑務所でも「又地先生」でした。刑務官ではないということもありましたが、新潟刑務所には、新潟少年学院を退院した受刑者が何人かいました。そのうちの一人が私の顔を見て驚いて「あ！又地先生」と叫んだものです。それで一度で刑務所中に「又地先生」と知れ渡ってしまいました。

話がそれました。

少年院は教育施設であり福祉施設でもある、罰を与えるところではない。

とはいえ、ラベリング、社会感情、鉄格子は現としてある。少年にとって少年院送致はやはり罰と認識されています。

この認識は、生徒にとっても教官にとっても乗り越えなくてはならない壁です。罰と認識されているうちは支援が入っていかないのです。また、少年

たちは、生きることへの認知そのものが相当ゆがんでいます。

彼らは、罰せられれば、罰が厳しければ厳しいほど、立ち直れると思ひ込んでいます。

しなくてはならないことはわかっています。それをやらないと罰がある。だから頑張れる。してはいけないこともわかっている。やってしまうと罰がある。だから我慢できる。

ところが罰に効き目はありません。

彼ら自身がそれを証明している、効き目があるなら少年院には来ていない。何度罰を受けても、過ちを繰り返してきた。

もちろん、人間にとって罰を決めておくことは必要です。刑法がその表れです。合理的な行動規制は必要不可欠です。

しかし、罰は規則を守っている人に対してだけ効き目があります。破ってしまった人には効き目はありません。

罰は、社会的非難、人間の報復感情にとって必要なもの、人の非難感情、報復感情を宥めるために必要なものなのです。

生徒たちの認知は、行動を「律する」ということにおいて、「罰が効く」ものだというふうにはゆがんでいます。罰によって（他の力によって）行動を律してもらうことを求めている

「他律的存在」彼ら非行を犯す少年の姿です。

## 7. 自律～少年院の目指すもの

彼らは「他律的存在」です。そこにっけいるのが、反社会的勢力、伝統的な暴力団、古くは暴走族、近くは愚連隊、チーマー、闇バイトの首謀者、それらの被害者となる東横キッズ、引きこもりの青年、障がい者、刑務所を出所者、少年院からの退院者…悲劇の連鎖が起こります。他律的存在でいる限り…罰による行動規制は対人関係の能力を阻害するのかもしれませんが。

入院する少年の半数以上が精神障害ありの診断をもらっています。「発達障害」「自閉症スペクトラム」の診断が多いです。

罰では、障害を支援することはできません。

他からの強制はない。しなくてはならないと言われていない。規則で決められてもいない。やらなくても罰はない。そんな中で態度、行動は変容していく…「**自律的存在**」が誕生するわけです。

たとえにあげたスリッパ事件。トイレには神様がいますという歌が流行ったことがありますが、全くそうだと思ったものです。

自律的な生徒によって少年院の生活は穏やかに明るく保たれていきます。

そもそも我々は日常生活で罰を意識して生活してはいません。せいぜい意識するのは道路交通法違反の反則金くらいでしょうか？

してはいけないこと、しなくてはならないことを意識するより、「したくないこと」「したいこと」に従って、自らを律して生活している。罰を意識し、取り締まりを意識する生活は不幸な暮らしです。

生徒たちの社会生活はまさにそうだったのです。その生活が変わることが**改善更生**です。

#### 自覚に訴えて改善更生の意欲を喚起する

まとめますと、少年院法にあるとおり少年院が目指すのは生徒の「自律」です。罰に頼らず自らの行動を律する力です。それを養うこと、これが少年院の仕事です。

### 8. 刑務所改革・改善指導・教育専門官

先に述べたように刑務所は罰を与えるところですが、中の様子、イメージは、「工場」と、「社員寮」です。

受刑者は毎日工場と寮を行き来します。隊列を組んで歩調をそろえて行進するところが普通と違うのですが・・・

食事は炊事場で受刑者が作ります。洗濯は洗濯場で受刑者が行います。高齢者の介護は介護班の受刑者がします。そういう作業はすべて刑務作業として行われています。

刑務官は作業を監督し、進捗を管理し、対人関係を調整し、健康を管理します。

刑務官は一切の武器を携帯していません。刑務官が武器を携帯しない刑務所など世界に類がありません。刑務官は受刑者に厳格な規律の維持を課す反面、慈愛を旨として受刑者に接しています。

この姿勢が受刑者の信頼を醸成し、世界に類のない規律と秩序が維持された刑務所運営をもたらしています。

そういう刑務所でしたが、現在、受刑者の半分は再犯者です。複数回、刑務所での受刑歴を持っているのです。再犯防止のためには作業をさせるだけでは不足であることが明白でした。そのような中、**2006年に監獄法が廃止**され「**刑事収容施設及び被収容者等の処遇に関する法律**」が施行されました。

その、第103条には、刑務所は受刑者に対して「**社会生活に適応するのに必要な知識及び生活態度を習得させるため必要な指導を行うものとする。**」と定められました。

この法律によって必要な指導（改善指導と呼ばれましたが）を受刑者に対して行うことは刑務所の義務となりました。

その後、指導を担当する「教育専門官」が刑務所に配置されることになり2011年4月新潟刑務所初の教育専門官として私が赴任することになりました。

刑務官になったわけではないのです。前例なし、カリキュラムなし、教材なし、なにもかも初めての試み、逆に言えば好きにやれの仕事で7年間を過ご

しました。

少年院での矯正教育を応用してカリキュラムを組みグループワークやワークブックを利用して森田療法、ソーシャルスキルズトレーニングetc

所謂、依存症と言われるもの、暴力団離脱ができない、薬物が断ち切れない、性犯罪をくりかえす、窃盗を繰り返すなどの受刑者には条件反射制御法というのを試しました。下総精神医療センターの平井慎二さんが開発した当時最新の療法です。赴任して3年目にやっと同僚が着任し、医療センターで研修を受けてやっと実施にこぎつけました。刑務所では日本初の取り組みでした。

## 9. 刑務所改革・刑法改正・拘禁刑

刑務所の改革は刑法の改正にもおおよびます。2025年に施行される改正刑法では懲役刑、禁固刑が廃止になります。

代わりに拘禁刑という刑が新設されます。拘禁刑では「**受刑者の特性に応じて刑務作業と矯正教育を実施することができる。**」と定められました。

それまでは、刑務作業は受刑者の義務であつたけれども、改善指導を受けることは受刑者の義務ではありませんでした。受けたくないとする人もいたわけです。

特に暴力団離脱指導は「受けません」という受刑者が多かった。離脱したいが言い出せずにいるもの、どうしたらいいのか迷っているもの、逆にしない

ことを決意しているもの、ともかくも離脱指導を受けますとは言い出せない人たちがいたのです。

しかし、拘禁刑では「矯正教育を受けること」が受刑者の義務として定められました。

今後、拘禁刑の受刑者は、薬物や性犯罪の更生プログラムを重点的に受け、刑務作業は従的処遇となる人もいれば、スムーズに社会復帰できるよう算数や国語などの教科指導を受けることになる人もいる。改善指導として刑務所が行ってきた様々な**教育的・福祉的支援が刑罰として行われる**ように改革されたわけです。

2023年には「市原青年矯正センター」が開所になりました。知的障害・発達障害などがある若年受刑者を対象とした、全国初の刑務所です。

「障害による生きづらさ、就労の難しさ、生活の困難さがある若年受刑者に対して、少年院の矯正プログラムを活用しながら社会復帰の支援」が行われています。

## 10. 刑務所改革・刑事政策の福祉支援化

すでに刑務所には社会福祉士が常駐しています。65歳以上の高齢出所者、または心身に障害のある受刑者は希望すれば出所後に福祉施設に入所できることになっているのです。法務省と厚生労働省が作った仕組みです。

刑務所に常駐する社会福祉士はその

仕組みを受刑者に伝え、多くは説得し希望者達の施設入所を支援しています。

福祉施設入所希望者はこれから増えるのではないかと思います。改善指導の効果が今まで以上に浸透するであろうこと、受刑者の高齢化が進んでいること、刑務所にも寝たきりの高齢受刑者がいて、その介護が刑務作業になっていることなど厳しい現実があります。

出所者の受け入れを福祉が担うことが期待され必要とされる所以です。

一方、社会では地域生活定着支援センターが活動していて、受刑者本人、刑務所の社会福祉士、受け入れ施設の間で入所の調整をしてくれています。

再犯防止からスタートした**刑務所改革は結果として福祉支援化**してきているのです。

## 11. 鉄格子は福祉？

犯罪行為は年齢を問わず、刑罰の対象となります。少年法も刑事罰を定める刑法の特別法という一面もあります。

しかし、刑罰は社会の報復感情をな

だめる方法として行われるものだと私は思っています。

「罪を憎んで人を憎まず」刑事政策の現場で働く者が以って銘ずる言葉です。

**犯罪を起こした人は支援の対象**です。

報復感情にとらわれていては、支援はできません。罰で支援はできません。

鉄格子は刑事罰の象徴です。感覚的に嫌悪されることが普通の鉄格子ですが、一方で、**構造化・体系化された支援の象徴**でもある。

鉄格子の中にいる彼らを支援するのは

## psychology of well-being

福祉心理学科に学んだ私たちの仕事？ ではないでしょうか？

というわけで鉄格子は福祉！ です。

元 法務教官 & 教育専門官

# 1995年福祉心理学科卒業、そして英語教育の道に

91P 渡部 真喜子

## 1. 私は、1991年に東北福祉大学の福祉心理学科に入学いたしました。

高校時代に全く勉強をしていなかったため、大学受験にことごとく失敗しました。2年の浪人生活で、自分の不甲斐なさや情けなさをひしひしと感じ、いわゆる「ひきこもり」のような状態になりました。大学生活を謳歌する高校の同級生をととても羨ましく思ったものです。その2年間で、自分自身と向き合い、心の動きに興味を持った私は「福祉心理学」という学科に進学することだけを考えて、受験勉強に励みました。第一志望の心理学科に合格したときの喜びは忘れられません。心理学科の同級生や学生をあたかく支援してくださる先生方との出会いにより、思い出深い4年間で国見で過ごすことができました。

どの先生方も、親身に学生のことを考え、より良い学びと研究ができるように支援してくださいました。お忙しい中でも、学生のことを第一に考えてくださり、優しさと厳しさをもって導いてくださいました。先生方のご厚情の下、カウンセリングマインドや研究に関することなど、様々にご指導をいただいたこと、とても感謝しております。

## 2. ある先生がかけてくださった言葉

を私は今でも鮮明に覚えています。

それは「馬力あるなあ。」です。卒業論

文で、あるウイルスに罹患した人に対する偏見についてまとめました。アンケート調査の結果をSPSSで因子分析等を行い、膨大なデータをもとに執筆しました。今から考えると、内容としてはとても稚拙なものだったと思います。口頭試問の日、私は恐る恐る部屋をノックすると、そこに小松先生がおられました。先生は丁寧に論文に目を通され、なぜその論題に興味を持ったのかをお尋ねになりました。そして、分厚くバサバサに閉じられていたデータをご覧になって「いやあ。馬力あるなあ。」としみじみおっしゃられたのです。何日も徹夜して書き上げてよかったと報われた気持ちになりました。

心理学科での日々は、その後の進むべき道を照らすものとなりました。研究の取り組み方やデータの検証の仕方だけではなく、論文の読み込みに必要な英語の学習の仕方についても、丁寧に教えてくださいました。

## 3. そして、人生が「動く」瞬間が訪れました。

実験が長引いたため、英会話学校に遅れそうになり、廊下を猛ダッシュしていると「そんなに急いでどこに行くの？デート？」と呼び止められました。「いいえ、英会話の学校に行きます。」「それってさー、ちょっと旅行ができるといいなあ程度？それとも本気？」「本気です。」

「そう。ちょっとこっちにおいで。」このやり取りだけを見ると、なにかコントのくだりのようですが、この瞬間から私の人生が大きく「動いて」いきました。あの時、廊下で声をかけていただかなかったら、今の私はなかったかもしれません。その後、幸運にもミシガン大学に留学する機会をいただきました。勉強に没頭する学生と研究者の中で過ごした日々は、今でも色濃く私の中に残っています。

あれから30年弱が経とうとしています。

#### **4. 私は、福祉大卒業でありながら、英語教育の道に進みました。**

ある先生によれば「もぐり」だそうですが、自分のやりたいことに突き進む勇氣と決断の素地ができたのは福祉大だと思っています。

英語教育を選んだのは、これからの次代を担う子どもたちに、グローバル、グローバルな視点を持つことを教示できるとともに、福祉大で培ったカウンセリングマインドや相手を思いやる気持ちを伝えていくことができると考えたからです。

畑違いからの挑戦でなんとか教員採用試験を突破し、中学校の英語教員になりました。しかしながらそれは、大きなハンデを背負って教壇に立つことを意味していました。英語が専門ではない私は「メッキ者」であるため、英語力を高めるだけではなく、先生方からスキルを学び、「英語授業のプロ」として磨きをかけようと努力してきました。

#### **12. そんな日々が後押ししたのか、**

文部科学省の英語教育推進リーダーの認定や、CAN-DOリストの活用の論文で

東書教育賞中学校部門で最優秀賞を受賞するなど、少しずつ道が開けてきました。

そして、福島県教育委員会で英語教育の指導主事として施策や重点事業の立ち上げ、先生方へ指導助言をする立場となりました。予算折衝の末に英語教育の重点事業を立ち上げた際、上司は私に「馬力あるなあ。」としみじみつぶやきました。

「ここでも！」とあの時かけていただいた言葉を思い出し、頑張れば認めてもらうことにつながるのだと大きな勇氣を持つことができました。落ち込む日々の連続でしたが、「馬力あるなあ。」と期せずして声をかけてもらえたことは、自分に誇りをもってよいのだと立ち上がるきっかけとなりました。

#### **5. その後は異例ですが、行政職や管理職ではなく、**

「教諭」として現場（中学校）に戻りました。生徒に近い場所で英語に関わっていたいという思いがあったからです。英語の授業に尽力することが、私が一番やりたいことであって、行政職や管理職は私のキャラクターからも合わない、またその器ではないと判断しました。

現在は教育関連会社や文部科学省での業務にも携わり、日々を忙しく過ごしております。今後またゆまずに「馬力」を生かして、英語教育の充実と発展に寄与していきたいと考えております。たとえ漆塗りのように何重も塗り重ねた「メッキ」であっても、それなりに、なにかしら役に立つことはあるかもしれません。「馬力あるメッキ者」として努力を重ねて尽力していきます。

4年を共に過ごした友たちは、それぞれの道を歩んでいます。震災やコロナ禍など、私たちに大きな試練を課す出来事がたくさんありました。もう会うことができない友のことを想うと、心が締め付けられるような後悔とつらい気持ちが込み上げてきます。私にできることは、折りに触れて友を思い出し、その魂が安らかであるよう、心から祈りを捧げることです。

私はこれまで、先生方に直接御礼を申し上げることはできませんでした。しかしながら、今回このような機会をいただき、先生方に支えていただいた感謝をお伝えすることができますこと、とてもありがたいと思います。私のように、心理学

科での先生方との出会いが人生で大きな支えになっているものがあります。それは、私一人だけではないはずです。先生方の教えは、末永く私たちの心の中に輝き続けることと思います。

先生方のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げるとともに、これからも私たちが先生方からいただいた教えを胸に、それぞれの道で成長していけるよう努力してまいりますので、今後ご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

現在

福島県 磐梯町立磐梯中学校 教諭



## 編集後記

この寄稿集作成にあたり、多くの皆様からご協力をいただきましたことに感謝申し上げます。

特定の領域や特定のゼミに偏らないように心がけたつもりですが、情報のやり取りの範囲がどうしても在学中の活動などに影響されることもあり、なかなか広げることができませんでした。

福祉心理学科での皆様の研究活動に加え、鬼籍に入られた先生方や同窓の方など、書かせていただきたいことがらは、かなりありますが、時間や能力の点から実現できていないことをお詫び致します。

ご寄稿、ご協力の皆様に改めてお礼を申し上げますと共に、皆様の今後のますますのご発展、ご活躍をお祈り申し上げます。

### 【お詫び】

編集担当者の作業が大きく遅れ、「書いていただきたい方」や、卒業生自らが「書かせてほしい」という方も多くいらっしゃるのに、ご案内できておりません。

改めて、今後も寄稿を大歓迎いたします。

お問合わせや、ご意見、ご投稿は

[ethori@med.saga-u.ac.jp](mailto:ethori@med.saga-u.ac.jp)

までお願いいたします。

文責 52P 堀川（武田）